

日本海に出現したトビイカ (*Symplectoteuthis oualanieensis*) について (短報)

鈴木重喜*・桑原昭彦*

トビイカ *Symplectoteuthis oualanieensis* は、アカイカ科に属し、沖合性・暖海性で、インド洋および太平洋の温熱帯域 (奥谷, 1977) や沖縄周辺海域 (当真, 1971, 1972) に多く出現する。しかし日本海では、その出現が、これまで知られていなかった。著者らは、1979年8月30日に、若狭湾沖合 (37°42'N, 130°10'E) において、スルメイカの釣獲試験中に1個体と、1980年11月1日に、京都府与謝郡伊根町 (35°41'N, 138°18'E) の大型定置網の漁獲物中から4個体を採集した (図1)。

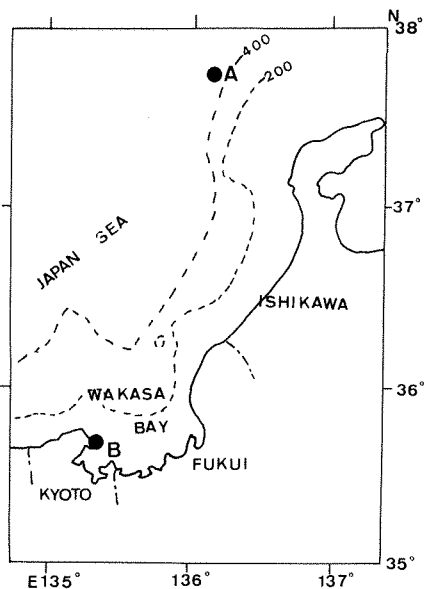


図1 標本の採集場所。A: 釣 (1979年8月31日), B: 定置網 (1980年11月1日)

この標本を検索した結果、日本海では、初記録のトビイカであることが判明したのでここに報告する。

検 索

今回採集された標本の生鮮時の体色は、暗赤紫色を呈し、一見スルメイカ *Todarodes pacificus* に類似してい

* 京都府立海洋センター

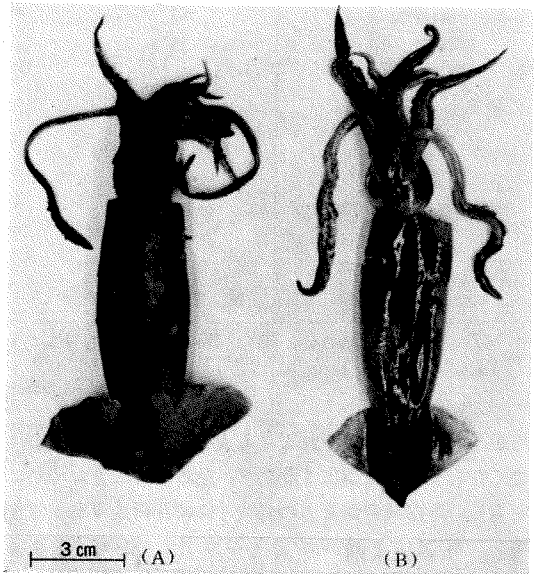


図2 トビイカとスルメイカの外形比較。
A: トビイカ, B: スルメイカ

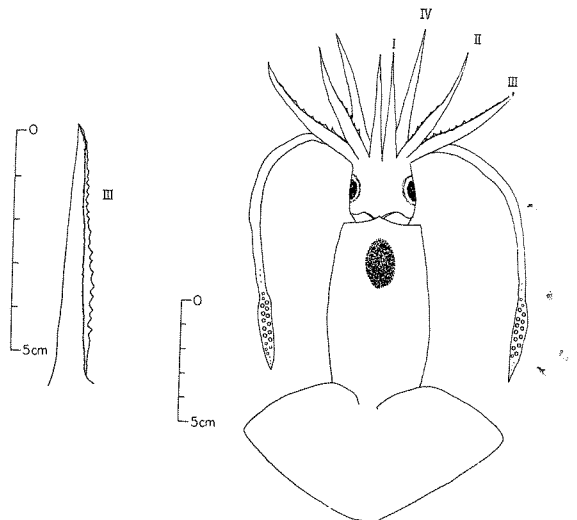


図3 トビイカの第Ⅲ腕および外套膜背側前方の表皮下の発光組織。

表1 Measurements of *Symplectoteuthis oualaniensis* (in mm)

Date of collection	Aug. 30, 1979	Nov. 1, 1980					
	1	2	3	4	5		
ML	124	99	101	87	68		
BW (g)	77	28	30	19	14		
FL	47	38	36	29	26		
FW	48	38	38	30	22		
A right	I	43	42	37	29	33	
	II	53	—	43	36	40	
	III	61	42	51	41	—	
	IV	53	39	40	35	30	
	left	I	47	38	36	28	31
		II	53	—	42	36	38
		III	60	48	49	40	36
		IV	53	53	36	43	31
TL	right	125	99	103	—	64	
	left	133	—	99	69	59	

ML: Mantle length, BW: Body Weight, FL: Fin length, FW: Fin width, A: Arm length, TL: Tentacle length.

るが、形態的には、それよりも丸味を持ち、後方で余り細くならず、鰭は幅広く菱形で、第Ⅲ腕には三角形の膜を有し、外套膜背側前方の表皮下に楕円形の発光組織を有し、外套膜と漏斗軟骨とが癒着している（奥谷, 1977）。しかし、外套膜背側前方の表皮下にみられる楕円型の発光組織は、1979年に採集された外套長 12.4 cm の個体では確認されたが、他の個体（外套長 10 cm 以下）では識別が困難であった（図 2, 3）。

5 標本の体各部位の測定は、ホルマリン固定された後に行われ、その結果は表 1 のとおりであった。

採集水域の海況

標本 1 の採集地点における水温は、海面で 23.6℃、20m 深 23.6℃、30m 深 18.7℃、50m 深 12.0℃ であり、20m 以浅に暖水が認められた。標本 2～5 の採集時の水温は、1 m 深で 19.5℃、25m 深 19.8℃ であった。

論 議

本種における沖縄周辺海域での産卵期は、6 月から 10 月であり、6 月下旬から 7 月に外套長 33.4～67.4 mm の幼イカが出現するという（当真 1971, 1972）。また、南シナ海北部海域では、5 月から 9 月に本種に属すると認められる 0.6～6.4 mm の *Rhynchoteuthis* 期幼体が採集されている（庄島 1979, YAMAMOTO and OKUTANI

1975）。このように、本種は、沖縄、台湾を含む東シナ海および南シナ海とその周辺海域でも産卵を行っているものと考えられる。

これらの海域で孵化した個体は、生活史の初期には、黒潮によって移送、拡散されるであろう。

ここに報告した 5 個体全てが、未成熟個体であること、また、黒潮の分流である対馬暖流の輸送量が 7 月から 11 月に最大となることから、トビイカは、対馬暖流によって日本海内部に移送されるものと考えられる。しかし、その量は少なく、しかも外部形態がスルメイカに酷似しているために、今までその出現が確認されなかったのであろう。

夏季に対馬暖流によって日本海へ移送されてくるハリセンボン *Diodon holacanthus* (西村, 1958)、ホシフグ *Boesemanichthys firmamentum* (小林・三井田, 1966)、ソデイカ *Tnysanoteuthis rhombus* (NISHIMURA, 1965)、ムラサキダコ *Tremoctopus violaceus* (横山・中村, 1981) 等の熱帯あるいは亜熱帯域由来の表層性魚類と同様に、本種も日本海内部では再生産が行われていないものと考えて差し支えないであろう。また、水温が 20℃ 以下に低下する 11 月に、本種が定置網に入網した理由としては、ハリセンボンやホシフグ等で報告されているように、秋季における北西の季節風によって生じる吹送流とともに沿岸水域に移送された結果であろうと考えられ

る。

このように日本海におけるトビイカの出現は、熱帯太平洋由来の“Guest”として、本水域の生物相にひとつ加えるものとして興味深い。

終りに、この研究を行う機会を与えられ、御指導下さった京都府立海洋センター所長 塩川司博士、標本の査定ならびに御指導の労を賜った国立科学博物館 動物研究部奥谷喬司博士に心から感謝する。

参 考 文 献

- 小林克一・三井田恒博. 1965. 対馬暖流沿岸域における1965年冬季にみられたホシフグの大量浮上へい死現象について. 福岡水試調査研究報告, 第11号, 1-13.
- 西村三郎. 1958. 日本列島対馬暖流におけるハリセンボンの“寄り”現象について—Ⅳ. “寄り”の機構に関する考察. 日本海洋学会誌, 14(3): 109-111, 109-111.
- NISHIMURA, S. 1966. Notes on the Occurrence and Biology of the Oceanic Squid, *Thysanoteuthis rhombus* Troschel, in Japan. Seto Mar. Biol. Lab., XIV (4): 327-349.
- 奥谷喬司. 1977 a. 改訂. 世界有用イカ類図鑑, 166 p p.
- 奥谷喬司. 1977 b. 日本南方海域におけるトビイカの生態とその漁業. 日本海ブロック試験研究集録, 第1号 (日水研編), 97-106.
- 庄島洋一. 1970. 南シナ海北部の表層に出現する頭足類の卵・稚仔—I. 西海区水研報, 38: 61-77.
- 当真 武. 1971. 琉球近海におけるトビイカ *Symplectoteuthis oualaniensis* (LESSON) についての基礎研究—I. 漁獲量の増大の可能性について. 琉球水試事業報告, 1970年度, 57-60.
- 当真 武. 1972. トビイカの仔魚について. 琉球水試事業報告, 1971年度, 90-93.
- YAMAMOTO, K. and OKUTANI, T. 1975. Studies on Early Life History of Decapodan Mollusca—V. Tokai Reg. Fish. Res. Lab., 83: 45-89.
- 横山 寿・中村 泉. 1981. 舞鶴湾に出現したムラサキダコ. 南紀生物, 23(1), 23-25.